

## ■帝王賞（Jpn I）アラカルト（過去全 39 回の分析）

---

- ※第 1 回（昭和 53 年）から第 8 回（昭和 60 年）までは大井ダ 2800m で実施
- ※第 9 回（昭和 61 年）からは大井ダ 2000m で実施
- ※第 9 回（昭和 61 年）からは中央競馬招待競走として実施
- ※第 18 回（平成 7 年）からは指定交流競走として実施
- ※第 20 回（平成 9 年）からはダートグレード競走として実施
- ※第 15 回（平成 4 年）は 2 頭が 1 着同着だったため、優勝馬は 40 頭、2 着馬は 38 頭
- ※第 9 回（昭和 61 年）は 2 頭が 3 着同着だったため、3 着馬は 40 頭
- ※記録は平成 29 年 6 月 9 日時点

### ■単勝 1 番人気馬と単勝 2 番人気馬の成績差が大きい

単勝 1 番人気馬は 13 勝、2 着 10 回、3 着 4 回で、勝率が 33.3%、連対率が 59.0%、3 着内率が 69.2%となっている。一方、単勝 2 番人気馬は 7 勝、2 着 5 回、3 着 2 回で、勝率は 17.9%、連対率は 30.8%、3 着内率は 35.9%にとどまっていた。

### ■単勝 3 番人気以内の馬が優勝した回は全体の 2/3

過去 39 回のうち 26 回は、単勝 3 番人気以内の馬が勝利を収めている。ただし、単勝 3 番人気以内の馬が 1~3 着を占めたのは、第 34 回と第 35 回の 2 回だけだ。

### ■“連覇”を果たせばレース史上初の快挙

帝王賞において 2 回以上の優勝経験があるのは、第 11 回と第 14 回を制したチャンピオンスター、第 31 回と第 33 回を制したフリオーソ、第 36 回と第 38 回を制したホッコータルマエだけで、2 年連続の優勝を果たした馬はまだいない。なお、フリオーソは第 32 回で 2 着となっており、3 年連続の連対は達成している。

## ■牝馬は4勝、外国産馬は優勝例なし

過去39回の優勝馬延べ40頭中、牝馬はコーナンルビー（第5回）、ホクトベガ（第19回）、ファストフレンド（第23回）、ネームヴァリュー（第26回）の4頭である。なお、外国産馬は第21回でバトルラインが、第23回でドラールアラビアンが2着となったものの、まだ優勝馬はいない。

## ■5歳馬と6歳馬がそれぞれ12勝をマーク

馬齢別の優勝回数を見ると、4歳が10勝、5歳が12勝、6歳が12勝、7歳が5勝、8歳が1勝となっていた。

## ■地方所属馬とJRA所属馬の3着内数はほぼ互角

中央競馬招待競走となった第9回以降の計31回に限ると、地方所属馬は14勝、2着11回、3着17回、JRA所属馬は18勝、2着19回、3着15回となっている。3着以内馬延べ91頭に対する割合で示すと、地方所属馬は約47%、JRA所属馬は約53%だ。

## ■騎手別の歴代最多勝記録は「5」

騎手別の勝利数を見ると、5勝の武豊騎手が単独トップ。昨年の第38回を制し、3勝で2位タイの高橋三郎騎手、的場文男騎手を引き離れた。

## ■調教師別の歴代最多勝記録は「4」

調教師別の勝利数を見ると、4勝の川島正行調教師が単独トップ。秋谷元次調教師、朝倉文四郎調教師、西浦勝一調教師、松田博資調教師が2勝で続いている。

## ■馬番15～16番は優勝なし、16番は連対例もなし

枠番別勝利数を見ると、8勝の3枠と8枠がトップタイ、7勝の6枠が3位だった。また、馬番別勝利数を見ると、5勝の1番と6番がトップタイである。ちなみに、優勝馬が出ていない馬番は15番と16番のみ。16番は現在のところ2着馬も出ていない。